

国 語

注 意

- 1 問題は 1 から 5 までで、16 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のア・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、**や**。**や**などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 7 受検番号を解答用紙の決められた欄に記入しなさい。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) ブボンの裾を上げる。
- (2) 禁忌を破る。
- (3) 権利を剝奪する。
- (4) 仕事の進捗状況について確認する。
- (5) 裁判官が罷免される。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) ニガムシをかみつぶしたような表情。
- (2) ギンマクのスターを夢見る。
- (3) ゲキヤクの取り扱いに注意する。
- (4) 活動届にシヨメイする。
- (5) 若者が米イッピヨウをかつぐ。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

高校三年生の「私」(知咲)は放送部に所属している。Nコンの申し込み時期が迫っているが、「私」は参加を決めかねている。同級生である部長の有紗から、「私」は一年生の森唯奈の面倒を看るよう頼まれた。ある日、有紗が「私」を呼び出し、父の看病のため休部したいと告げた。「私」は思わず詰め寄った。

「おかしいと思ったんだ。この部はあの子に掛かっているなんて、いつもの有紗なら絶対言わない。私が部を引く張つてくから大船に乗った気分である、みたいなこと言うはずだもん。有紗さ、最初からNコン出ないつもりだったんでしょ。だから唯奈ちゃんの面倒を看ろつて私に言ったんだ。あの子は上手いからNコンでも上位を狙える、部に馴染めないって理由で途中で辞められるわけにはいかなかった。だから、アンタは私を利用して唯奈ちゃんをこの部に繋ぎとめようとしたんだ。……違う?」

「言い方に悪意があるよ。私はただ、安心して部活を抜けたかっただけ。結果を出せなきゃ、OGとかに悪いじゃん。森ちゃんだったら確実に結果を出せると私は踏んでる。」

「なんでもっと早く言わなかったわけ。ちゃんとやってくれたら私だって有紗のために結果出そうって頑張ったよ。それとも何、私じゃ頼りにならないって言うの。」

「実際そうでしょ。」

声を荒らげた私に、有紗はひどく冷静な声音で告げた。鍛えられた声を震わせ、彼女はとても美しい声で残酷な台詞を吐く。

「知咲ってば、一年生の頃に失敗してからずっと本番から逃げてるし。今年だって出る気なかつたんでしょ? そんな子をどうやって頼るの?」

いつ逃げ出すかわかんないのに。」

核心を突かれ、私はぐっと息を呑む。短い前髪を指先で払い、有紗は真っ直ぐにこちらを見た。風いだ水面のような双眸に、醜い表情をした私の顔が映っている。

有紗は言った。

「アンタは意気地なしだよ。ずっとずっとそう。傷つのが怖いから逃げてるだけ。自分に居心地のいい場所に引きこもって、そのくせ他人の功績ばかり羨んでる。高いプライドを飼い慣らせなくて、なのに現状で満足してるとってフリしてる。」

——アンタさ、本当は私に勝ちたいんでしょ。

彼女の唇から発せられた言葉が、私の頭をガツンと殴った。手から、だらりと力が抜ける。自身の心臓の音が、やけに鼓膜に響いていた。視界が滲む。しゃんと背筋を伸ばしてこちらを見る有紗はいつだって凛々しくて、それが私を一層惨めな気分させた。

「ずっと、そう思ってたんだ。」

有紗は何も言わなかった。その手に握りしめられた、いくつものストッブウォッチ。止まったままの時間を握りしめ、彼女はこちらを見つめている。

「……もういいよ。もう、いい。」

私の言葉に、有紗の喉がひゅつと鳴った。向こうからこちらを切り捨てたくせに、その表情は今にも泣きそうに歪んでいた。いつも笑っている彼女のそんな顔を、私はこの瞬間初めて見た。罪悪感が心臓を握り潰し、そのまま私を殺そうとした。

(2) その場にいられなくなつて、私は放送室の扉を開いた。部屋を後にしても、有紗は声すら掛けてこなかった。彼女の制止の声を待ちわびる自分の未練がましさを嫌になる。

「最悪。」

眩いた声^{つぶや}がぼつりと上履きの上に落ちる。白い生地の上に、水滴にも似た染み^{しみ}が出来た。

「……先輩？」

ふと声^{こゑ}が聞こえ、私は顔だけをそちらに向けた。スタジオ側の扉から顔を出したのは、唯奈だった。彼女はこちらの異変に気が付いたのか、心配そうに近付いてくる。

「大丈夫ですか？」

その問いに、私は何も答えなかった。その反応を訝しく思^{いぶか}ったのか、唯奈が困ったように眉尻を下げる。彼女の純粋な優しさが、今の私には煩わしかった。その柔らかな心を感情のままに傷付けてやりたい。理性が働く前に、激しい衝動が私の舌を支配した。

「うるさいなあ。」

口から飛び出した声は、自分のものとは思えないほど低かった。怯えたように、唯奈がビクリと身を震わす。その反応にますます苛立ち、私は大仰に舌打ちをした。

「アンタには関係ないじゃん、ほつといて。」

唯奈の瞳が大きく見開かれる。こちらから距離を取るように、彼女は一步後退^{あとひき}りした。これが私と唯奈の本当の距離だ。唯奈が私を慕って^{あこが}れていたのも、所詮は私が優しい先輩を演じていたからだ。優しくない私なんて、どうせ無価値だ。

「先輩、私は——。」

⁽³⁾「私のことなんてどうでもいいでしょ。唯奈ちゃんにはもう、他にも友達がいるんだからさ。」

悲鳴にも似た唯奈の台詞を遮り、私は静かに彼女に告げた。そのまま足を踏み出し、私は廊下を駆けだした。後ろから唯奈の声が聞こえてきたが、それもすべて無視した。逃げ出したかった、過去からも、現在か

らも。

上履きのまま、私は駆けた。校舎に充滿する湿った空気を吸うことすら耐えられなくて、私はそのまま学校を出た。雨足は強くなる一方だったが、それでもかまわなかった。雲から滴り落ちる涙が、私のシャツを一瞬で濡らす。カッターシャツが肌に吸い付き、白の布地からは肌の色が透けていた。びしょ濡れのまま制服姿で駆ける女子高生に、周囲から奇異の視線が突き刺さる。

「——はあっ、」

息が切れ、私は人気のない公園で立ち止まった。誰もいない噴水の前に蹲り、そのまま深く息を吸い込む。水分を含んだ空気はじつとりと重く、肺に鉛を流し込まれたような、そんな気分になった。熱に浮かされた脳が、冷静さを取り戻す。目を閉じると、唯奈の傷付いた表情が眩を過ぎ^よった。馬鹿だ、私は大馬鹿だ。心配してくれた後輩に、あんな八つ当たりをするなんて。

——アンタさ、本当は私に勝ちたいんでしょ。

有紗の声が、耳元で蘇る。私は唇を噛み締め、じつと目を瞑った。そうだ。私は有紗に負けたくなかった。だから有紗の前で無様な姿を晒したあの日以降、本番から逃げるようになったんだ。注目されるのが怖かった。恥をかくのが怖かった。また失敗して、有紗から見下されたらどうしようって、そればかりを考えた。だって、私は有紗と対等でありたかつたから。

今になって気付いた。私が怖かったのは、他人からの視線じゃない。有紗から自分がどう見られているのか、そればかりを気にしていた。先ほどの傷付いた有紗の顔を思い出す。有紗だって、本当はあんなこと言いたくなかったに違いない。放送部を、朗読を、彼女はこよなく愛していた。きつと休部だったけど、きつと愛したはずだ。そんな彼女にあんな顔

をさせたのは、他でもない私だった。

「『でも、伝えようとしなきゃ、なんにも始まらないんだよ。』」

唇からこぼれたのは、お気に入り^{*}の台詞だった。そうだ。最初から分かっていた。伝えようとしたって、伝わらない時がある。だから、ちゃんと手を伸ばさなきゃいけないなかったのに。私はいつだって逃げてばかりだ。自分の自尊心だけが大切で、傷つくことが怖くて、そのせいで大事なものを見失う。

⁽⁴⁾「ほんと、最低だ。」

目頭が熱い。言葉が嗚咽^{おとげ}となって、私の喉を震わせた。何を叫んだって、雨音で何も聞こえやしない。冷え切った指先を握りしめ、私は世界から身を守るように背中を丸めた。有紗のことが好きだから、だからカッコ悪い姿を見せるのが怖かったんだよ。そう、素直に言えばよかった。今さら後悔したって、もう遅いけど。私はゆるやかに瞼を閉じる。もう、何も考えたくなかった。

「先輩、」

ふと、世界から雨の音が消えた。女子にしては低い声が、私の耳元をくすぐった。温かな何かが私の手を優しく握る。冷えた皮膚越しに感じるじんわりとした熱に、私はゆっくりと瞼を上げた。

「先輩、ここにいたんですね。」

そこに立っていたのは、唯奈だった。随分と走り回ったのか、その肩は激しく上下していた。透明なビニール傘の端には黒い猫のマークが描かれており、そこに溜^たまった雨がざあざあと地面に流れ落ちていく。彼女は私へと傘を差し出すと、今にも泣きだしそうな顔で言った。

「良かったです、生きてて。」

その声があまりにも切迫していたものだから、私は思わず口元を緩めた。死ぬわけじゃないよ。そう言おうとしたはずなのに、声は喉に張り付いてほとんど出てこなかった。先ほど私が身勝手に振り払ったはずの彼女

の手が、真っ直ぐにこちらへと伸びてくる。その手は、私を求めていた。私だけを求めていた。彼女の手から伝わる熱が、私の意識を溶かしていく。皮膚越しに感じる熱が、今この世界で私が唯一信じられるものだった。

唯奈は縋^{すが}りつくように私の背に腕を回すと、そのまま子供みたいに泣き出した。嗚咽のせいで、彼女は何度も言葉を詰まらせた。

「死んじゃうかと思いました。先輩、ひどい顔してたから。」

「そんなわけないじゃん。」

今度はうまく声が出た。あやすように、私は彼女の背中を優しく撫^なでる。唯奈の手から落ちた傘がぱしゃりと水たまりの上に落ちた。それでも、唯奈は私から手を離さなかった。

「駄目だよ、放送部が身体冷やしちゃ。風邪ひいたら喉やられるよ。」

「それは、こっちの台詞です。」

彼女は乱暴な動きで自身の目を擦^{こす}ると、それからようやく私に抱き付くのをやめた。離れていく熱に未練を感じている自分の弱さに、私は思わず苦笑する。唯奈は唇を噛んだまま、そっと握りしめていた拳を開いた。

「有紗先輩が心配してました。他の部員たちに知咲先輩を探すように頼んで、それでみんな、先輩のこと探してるんです。」

「有紗が私の心配を？」

「言いすぎちゃったって言ってました。先輩、元気な良かったです。」

⁽⁵⁾ 彼女は捲^まき立てるようにそう言って、それからそっと踵^{かかと}を上げた。私より拳一つ分低い場所にある彼女の目が、対等な視線を投げかけてくる。

「私、先輩のことをどうでもいいとか絶対に思わないです。先輩は自覚ないですけど、初めて先輩が私に話し掛けてくれたとき、私、すっごく嬉^{うれ}しかったです。だから、他に友達ができて知咲先輩は特別だし、

私はどんな先輩でも好きでい続けると思います。」

そこで唯奈は一度言葉を切った。熱に浮かされたように話す彼女の目は必死で、そのがむしゃらさが今の私にはひどく心地よいものに思えた。「正直に言つて、私ちよつとだけほつとしたんです。知咲先輩について優しいけど、なんか心に距離があるみたいに思つてたから。でも、私にほつといて言つた先輩の顔、すつごく苦しそうで、私が初めて見る顔で。もしかしたら弱いとこを見せてくれたのかなつて思つて、そして、私いつつ先輩にもらつてばつかだつたから、今ぐらい頑張らなきゃつて。私、好きだつてちゃんと伝えようと思つて。先輩のこと大好きで、だから力になりたいつて。ちゃんと伝えなきゃつて、そう思つたら、気付いたらここにいたんです。」

言いたいことを全て言い終えたのか、彼女はすつと口を噤んだ。その顔は真つ赤で、それが走り回つたせいなのか、それとも興奮しているせいなのかは私には分からなかつた。ただ一つ分かっていることは、私の顔もきつと赤いであろうということだけだつた。恥ずかしさを堪えるように、私は乱暴に彼女の髪をかき混ぜた。胸の奥が温かくて、なんだか脳が蕩けてしまふさうだつた。誰かに求められるということは、こんなにも幸福なことなのか。そう思つた途端、本音が口を衝いて出た。

「私、臆病者だつた。伝えることから逃げてても、なんにも始まらないのにね。」

自嘲交じりにこぼした言葉に、唯奈が驚いたように瞳を揺らした。二つ年下の目の前の少女は、勇気を振り絞つてこんな私に温かい言葉を掛けてくれた。彼女は私を受け入れてくれた。本当は、ずつと前からそうすべきだつたんだ。現実の自分を受け入れて、前に進まなきゃならなかつた。

私は地面に落ちてゐる傘を拾い上げると、それを唯奈へと差し出した。

(武田綾乃「白線と一步」による)

〔注〕Nコン——放送のコンテストの名称。

OG——女子の卒業生。

お気に入りの台詞——Nコンで使用する台本にある台詞。

〔問1〕 凧(1)だ水面のような双眸(まなこ)に、醜い表情をした私の顔が映っている。

とあるが、この表現について説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 有紗が「私」に無関心を装う様子(よそお)と、有紗に対して侮蔑的な感情をあらわにしている「私」の姿とが表されている。

イ 有紗が「私」に対して激しい憎悪(にくみ)を抱く様子と、有紗の挑発的な態度によって困惑する「私」の姿とが表されている。

ウ 有紗がつとめて感情を抑えようとする様子と、有紗の言動によって大きな衝撃を受けた「私」の姿とが表されている。

エ 有紗が懸命に涙をこらえようとする様子と、有紗に対して反抗心をむき出しにしている「私」の姿とが表されている。

〔問2〕⁽²⁾ その場にいられなくなって、私は放送室の扉を開いた。とあるが、なぜ「私」は「その場にいられなくなっ」たのか。その理由として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 初めて見る有紗の泣きそうな顔を目にして、感情的になった自分の態度によって有紗が傷付いたことを感じ取り、有紗の前にいることに耐えられなくなったから。

イ 反論の機会さえ与えずに、誰にも触れられたくない部分に踏み込んでくる有紗への嫌悪感^{けんおつかん}が募り、自分に理解を示さない有紗との関係を断ち切ろうとしたから。

ウ 外的な指摘をし続ける有紗の態度に怒りが込み上げ、思わず相手を見下す発言をしてしまったことで有紗が泣き出し、どうしてよいか分からなくなつたから。

エ 責任感をもって、部活のために言うべきことを、ためらいながらも伝える有紗に引け目を感じ、これ以上この場で平静さを保っていられる自信がなくなつたから。

〔問3〕⁽³⁾ 「私のことなんてどうでもいいでしょ。唯奈ちゃんにはもう、他にも友達がいるんだからさ。」とあるが、このときの「私」の気持ちに最も近いものは、次のうちではどれか。

ア わざと傷付けるような態度をとつても、感情を表に出さない唯奈を遠く感じ、避けられていたことに気付いて投げやりになっている。

イ 自分を肯定できない現状を前にして、心配してくれる唯奈さえうとましく感じ、自分を取り巻くものから逃げ出したいと考えている。

ウ 有紗に頼まれて唯奈には優しく接してきたのに、厳しい態度を見せた途端に自分との間に距離を置こうとする唯奈に落胆している。

エ 怖がっている唯奈をかわいそうだと気遣う一方で、唯奈の本心がつかみきれないため、自分の苛立ちを抑えることができないでいる。

〔問4〕⁽⁴⁾ 「ほんと、最低だ。」とあるが、なぜ「私」は「最低だ」と言ったのか。その理由として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 相手の欠点を指摘するだけだったこれまでの自分を愚かしく感じ、今後は自身の態度を改めていこうという気持ちになったから。

イ 有紗に勝ちたいという気持ちを優先してしまい、自分勝手な行動によって大切な放送部を台無しにした自分を認めたくなかったから。

ウ 傷付かないように慎重に言葉を選んで有紗は助言してくれたのに、素直に感謝の気持ちを伝えられなかった自分が嫌になったから。

エ 相手に働きかけることが大切だと分かっているながら、自分の殻を破る勇気を出せなかったいつも通りの自分を許せなく思ったから。

〔問5〕 彼女は捲し立てるようにそう言って、それからそつと踵を上げた。

とあるが、ここでの「唯奈」の様子を説明したものととして最も適切

なもの、次のうちではどれか。

ア 今まで何かと目をかけてくれた知咲の力になりたいと考え、思い切つて自分の気持ちを真つ直ぐ伝えようとしている。

イ 心が通い合っていると感じていた知咲の弱い部分を見るのがつらくて、何とか知咲に元気を取り戻させようとしている。

ウ 初めて本心を打ち明けてくれた知咲に親密さを感じ、これからは自分も対等な立場で本心を語ろうとしている。

エ 知咲の苦しみを共有し、他の友達と等しく大切な存在であることを伝えることで、知咲を支えようとしている。

〔問6〕 本文の表現について述べたものとして最も適切なものは、次のう

ちではどれか。

ア 有紗や唯奈との衝突を経験していく中で、自分の弱さを受け入れられるようになっていく知咲の姿が客観的に描写されることによって、知咲の成長が効果的に表現されている。

イ 「温かな何かが私の手を優しく握る」や「彼女の背中を優しく撫でる」などの身体に関わる描写では心の交流も表現されており、登場人物の心情が理解しやすくなっている。

ウ 本文中で四箇所用いられている「――」は、知咲が聞き取れなかったということを示しており、それぞれの場面における知咲の心理状態が効果的に表現されている。

エ 基本的には知咲の視点から作品世界が描写されているが、ところどころに見られる有紗や唯奈の視点からの描写によって、登場人物の心情が把握しやすくなっている。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(* 印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

私たちは、しばしば自分の心を「内面」とか「内側」と呼んでいる。「私の内面」といえば、自分の心理状態を指すのだし、「彼女は内省的な人だ」といえば、自分の心理状態をしばしば参照し、心理に言及した言葉で自己表現する人のことを言うだろう。日常生活だけではなく、学問の世界でも、心は隠された内面として想定されていることが多い。認知科学でも、心的機能や状態はその人の内部状態であり、他者理解とはその内的な表象や欲求の理解に他ならないとされている。

⁽¹⁾「内面」は、私たちの社会では不思議なかたちで価値づけられた言葉である。たとえば、引つ込み思案の態度は現代の産業社会のなかではあまり有利に働かないが、他方で、そうした人を「内面の豊かな人」などと形容して評価することがある。「内面の豊かな人」とは、いろいろなことを考えたり思いいたりしても、その場で口に出さない人のことを言うのである。ここで「内面」とは、表現されない思考や発想と考えられている。

このように「内面」とは、その人にとって何か貴重で大切なもの、その人の財産のようなものであり、人目に触れては価値が減ってしまう内密なものと思われている。この意味でまさに内面とはプライバシーのことだと言つてよいのだが、しかし、それはすなわち心的なものなのだろうか。⁽²⁾「心とは内面のことであり、プライベートなものだ」。こう言つてよいのだろうか。

^(A)心を「内側」と表現することは、本来、比喩に他ならない。内側とは、何かに囲まれた空間的な内部のことを意味するはずであるが、心がそうした何かの内部空間に収まっているのではないからである。だが、この比喩は強力であり、この表現を使わずに人間の心理について語るのは難

しいほどである。

心を内なるものと捉える傾向が強いのは、ひとつには、現代では多くの人が、「心は脳にある」と考えているからであろう。心理学や認知科学でもそう想定されているがゆえに、「内部表象」といった表現が使われるのである。たしかに脳は、(通常の状態と状態では)外側からは見えない身体の内側にあり、ここから、「心が脳にあるのなら、それは身体の内側にある」と考えるのは自然である。しかし、心を内面とか内側とか呼ぶおもしろい理由は、「心＝脳が身体の内側にある」と考えたからではないだろう。すくなくとも、それは派生的・補強的な理由ではないだろうか。むしろその逆に、「心は内側にある」という考えをもつていたからこそ、「それは脳なり心臓なり、身体の内側にあるのだろうか」という発想につながったのではないだろうか。

普通の意味で「内側」といえば、他人からの視線が遮られる衝立や壁や塀のこちら側のことである。それは、壁の内側であり、部屋の内側であり、服の内側のことである。逆に、外側とは、その障壁の外側、すなわち、他人の視線に晒される側のことである。内側と外側は相補う関係にあり、一方がなければ他方はない。したがって、心を内面と呼ぶことは、他人の視線から遮蔽されていること、つまり他人には隠されていることを意味している。

しかしながら、心は、内臓のように身体の内側にあるから、他人から隠されているのだろうか。心臓や脳のような臓器は、皮膚や筋肉の奥に位置しているとはいえず、それは外部の観察者から原理的に見えないものではない。外科医は、毎日のようにそれらを観察していることだろう。これに対して、心は身体の内側を開ければ見えるようなものではない。生理学者も、脳のある箇所の興奮を見つけることはできても、「痛み」を見つけることはあるまい。そもそも心なる物(心という実体)は、どこを探しても見当たらないのである。

ここからあきらかなように、心が隠されたものであるという私たちのイメージは、空間関係を起源にしているのではない。それは、まさしく隠されているからこそ、内側なのである。心とは内面のことであると考えることは、心を他人に隠されたものと定義づけることなのである。

では、内側や内面と対立関係にあり、それらを規定してもいる外側・外面とは何であろうか。それは、あきらかに、他人から見える私のふるまい、他人から観察可能な私の行動のことを指すはずである。この行動には、表情や小さなしぐさのような微細なふるまいも含まれる。

だが、他人からも観察可能な私のふるまいは、私の心理状態とは別のものなのだろうか。³それは奇妙な考えであろう。私たちは多くの場合、率直に喜びを顔や動作に表す。何かとくに制約条件がないかぎり、私たちは思いのままにふるまう。

このように、ふるまいがそのままにその人の心理である場合は、数多く存在する。いや、日常言語学派の哲学者、ギルバート・ライルによれば、私たちが、ある人の（自分自身も含めて）心について述べるときには、つねにその人の行動について述べているのである。

われわれが心的述語を用いて人間を記述する場合、われわれは、意識の流れの中に生起する実体のない幽霊のような過程を求めての推論「中略」を行なっているわけではなく、むしろ、顕著な公的振舞い（ふるまひ）を構成するもろもろの部分が統轄される有様を記述しているということである。

私たちは、心を指し示す人格的特徴として、「優しい」とか「愚か」などという言い方（ライルの言う心的述語）をする。そうした場合には、私たちは、あたかも、その人のなかに心なる物（≡実体）が存在している、その物に「優しい」といった性質が宿っているかのように想定しが

ちである。ちょうど、机という物が、硬いとか茶色といった性質をもっているように。しかし、ライルによれば、心的な特性や能力の基体として、心を想定することは誤りである。私たちが、実際に観察しているのは、ある種の身体的な行動パターンに他ならない。身体的行動の背後に、それを表出している基体ないし実体としての心を想定してはならない。

たしかに、私たちは、現在、自分の目の前にいる人のふるまいを見て、そこで見聞したことを越えてその先まで立ち入ろうとする。たとえば、ある人の勇敢な行動を見て、その理由やその人の性格について考えるであろうし、そのふるまいが偽りや虚勢ではなく、「本物の」勇敢さであるかを確かめたくなるであろう。しかし、その人の勇敢さの理由を知ることとは、勇敢なふるまいをその人にさせた「勇敢な心」という隠れた原因を、その人のどこかに見出すことではないし、観察された行動の背後にまわり込むことでもない。その人の勇敢さの理由を知るとは、そのときのふるまいを、その人の過去のふるまいやそれまでの状況と関連づけ、生活史のなかにそのふるまいを位置づけることに他ならない。

ふるまいからその人の性格を判断することは、その人のもっているある種の能力や傾向性を知ろうとすることである。すなわち、その人は困っている人を見ればつねに勇敢なふるまいをするのか、あるいは、自分の利害や名声などが絡んだ場合にのみ「勇敢な印象を与える」ふるまいをするのか、などを知ることである。よって、何かそのふるまいの原因となるような背後の実体を想定する必要などないのである。

また、私たちは、「意志が弱い」とか「強い」とか、あるいは「決意が堅い」といった表現をしばしば用いる。そうしたとき、心とは何かエネルギーのようなもので、その奔流がある時点で行動を開始させたり、行動が続いているあいだずっと流れ出ていたりするかのような想定をしがちである。しかし、^B心をマグマのようなエネルギーにたとえることは、やはり比喩にすぎない。

〔問3〕^(A) 心を「内側」と表現することは、本来、比喩に他ならない。

^(B) 心をマグマのようなエネルギーにたとえることは、やはり比喩にすぎない。とあるが、「他ならない」、「すぎない」という表現には、筆者のどのような意図が込められているか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 「内側」や「マグマのようなエネルギー」は心の比喩的な表現としてしばしば使われているが、「他ならない」、「すぎない」と付け加えることで、これらの表現よりも適切な言い方があるはずなのにそれを見いだせないもどかしさを伝えている。

イ 「内側」や「マグマのようなエネルギー」という比喩的な表現は心のあり方を端的に示していると思われるが、「他ならない」、「すぎない」と付け加えることで、心のあり方について私たちが抱えている思い込みを揺さぶりをかけている。

ウ 「内側」や「マグマのようなエネルギー」は心の比喩的な表現としてはありふれたものであるが、「他ならない」、「すぎない」と付け加えることで、論を分かりやすくするためにありふれた表現をあえて選んだという真意を明らかにしている。

エ 「内側」や「マグマのようなエネルギー」という比喩的な表現を用いると心には実体がないことになってしまいが、「他ならない」、「すぎない」と付け加えることで、心には生来備わっている性質が存在するということを強調している。

〔問4〕⁽³⁾ それは奇妙な考えであろう。とあるが、なぜ「奇妙」であると筆者は言うのか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 外面に表れる行動が内面にある特定の性質と相反する例は数多くあるのに、外面と内面の間には区別がないという捉え方に従うと、行動と心理状態との関連の仕方が説明できなくなるから。

イ 外面に表れる行動と心理状態の間には元来結びつきが見いだせないものなのに、外面と内面は補完し合うものだと捉えると、ふるまいと心理との間につながりが生じることになってしまうから。

ウ 外面に表れる行動は他人の観察によってその意図が明確になるものなのに、他人は介入しないものだと考えると、行動をする本人にも行動の意図が分からなくなってしまうことになるから。

エ 外面に表れる行動と心理状態との間に関わりがあるのは身近な例からも明らかなのに、心は内なるものだという考えにとらわれすぎると、行動と心理状態の間には関連性がないことになるから。

〔問5〕 本文の内容や構成について説明したものとして正しいものはどれか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 心は体の内側にあるという表現が比喩でしかないと疑問に答える形式で説明するとともに、反論の材料として挙げたライルの説を否定して結論を説得力のあるものに行っている。

イ 心はその人の内面にあるという常識の成立過程を具体例やライルの説によって丁寧に説明した後で、それが実は先入観に過ぎないものだという自説を論理的に展開している。

ウ 心と内面の関係についての常識的な考え方に疑問を提示することで論点を明確にし、具体例を用いたりライルの説を引用したりしながら自説を補強して結論に導いている。

エ 心はどこにあるのかという哲学的な話題を身近なものにするために、具体例やライルの説に疑問を投げかけては答えるという手法で論を進めて結論を受け入れやすくしている。

〔問6〕 心を内面性として定義する人たちは、心をかなり狭く定義しているばかりではなく、他人に観察できるもの、その意味で公共的なものを心の定義からはずしてしまっているのである。とあるが、このことについてあなたはどのように考えるか。「公共的なもの」の具体例を挙げて、次の〔指示〕1～5に従って二百五十字以内で書け。

〔指示〕

- 1、や。や「などのほか、書き出しや改行の際の空欄もそれぞれ字数に数えること。
- 2 二段落構成にして、第一段落の終わりで改行すること。
- 3 第一段落では「公共的なもの」について、具体例を挙げること。
- 4 第二段落では筆者の意見を踏まえてあなたの考えを述べること。
- 5 二つの段落が論理的につながり、全体として一つの文章として完結するように書くこと。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。なお、本文中に引用された古文の後の（～）内の文章は、現代語訳である。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

物語は、どこまでも平安時代の貴族社会に誕生した新しい文学ジャンルである。その時代その社会の必要や要求、あるいは期待や支持が集中しなければ、新ジャンルの成立はありえない。物語文学には、当然、平安時代の貴族社会の現実に根ざす必要にささえられ、その要求に応える性質があるはずである。物語の成立は平安時代の「現代」と深くかかわるのである。

物語はたしかに伝承性を基層とする。しかしまた、そのうえに重ねて「現代」の社会、世態を描き、「現代」の人の心を写そうとしていることも確かである。この、物語の「現代」にかかわる性質を、伝承性に対して、いちおう、現実性と呼んでおこう。これは現実を直視し批判しようとする精神でもあり、社会の矛盾をとくに苦しみ、人々の渴望をとくに癒そうとする愛情でもある。「あるがまま」の現実を乗り越えて、「あるべき」理想を探ろうとする努力でもあるといえるであろう。物語の現実性は、『源氏物語』にいたって、虚構による現実の再現は事実をただ記述する歴史以上に真実であるという文学的自覚にまで深化するが、なによりも、わずか一世紀の間にかかる文学的自覚を有するにいたったジャンルとしての上昇力・発展力そのものが、物語の現実性の存在とその成長のたくましさとの証となるであろう。

『竹取物語』は超現実的伝奇的な世界を描いている。「かたりごと」以来の伝承性は揺るがない。しかし、物語の現実性もまた物語ジャンル成立に必須の要件であった。たとい素朴であり幼稚であるとしても、「物語の出で来はじめの祖」が現実性を備えていないはずがない。永遠美を

幻想するお伽噺とか芸術童話といった評があるいっぽう、風刺小説、世態小説として理解しようとする立場があるというのも、『竹取物語』に伝承性と現実性とがともに存し、しかもたがい自らの優位を主張して相譲らぬところがあるからであろう。

『竹取物語』の現実性を見るには、たとえば、同じく竹取翁譚の伝承を採録したと思われる『今昔物語集』の「竹取ノ翁、見付ケシ女ノ児ヲ養ヘル語」と比べてみるとよい。この説話は、末尾の、

其ノ女遂ニ何者ト知ル事無シ。亦翁ノ子ニ成ル事モ何ナル事ニカ有ケム。惣ベテ不心得又事也トナム世ノ人思ケル。此ル希有ノ事ナレバ、此ク語り伝ヘタルトヤ。

（その女はついに何者ともわからない。また翁の子になった事もどういうわけがあったのだろうか。すべて納得のいかない事であると世の人々は思った。こういうまれにみる事なので、こう語り伝えているということだ。）

というところに主眼がある。「希有ノ事」を希有と認めて事の筋道だけを語ろうとするのである。この不思議な「女」には人間の感情がない。まことに「何者ト知ル事無シ」である。どこまでも「女」が人間でないことを強調する。「女」がわずかに感情らしい感情を示すのは、帝の求愛のことばに応えていう、「我、后ト成ラムニ無限キ喜び也ト云ヘドモ……」（私は、后となるのは限りない喜びであると言っても……）、ただそれだけである。これに対して物語では、場面場面をくわしく描くばかりではない、登場人物の「心」を生かそうとつとめている。

骨組みは『今昔物語集』の話とほぼ同じであり、かくや姫もまた不思議な「女」には変わりない。しかし、物語の「変化の人」は、地上にあるかぎり、人間の心情を持たされているのである。結婚を勧められては、よくもあらぬかたちを、深き心も知らず、あだ心つきなば、後くやしきこともあるべきを、と思ふばかりなり。世のかしこき人なり

とも、深き心ざしを知らずは、あひがたしとなむ思ふ。

〈私の容貌が美しいというわけでもないのに、相手の愛情の深さを確かめもしないで結婚して、相手が不誠実な心を抱いたら、後悔するにちがいない、と思うだけなのです。この上なくすばらしい方でも、愛情の深さを確かめないで、結婚しにくいと思います。〉

と、適齢期にある子女として当然の思慮をもつて答え、帝の求婚をも拒みながら、さすがに、

御返り、さすがに憎からず聞えかはしたまひて、おもしろく、木草につけても御歌をよみてつかはす。かやうにて、御心をたがひに慰めたまふほどに……

〈お返事は、さすがに情をこめてやりとりなさつて、趣深く、季節ごとの木や草につけて帝は歌を詠んでおつかわしになる。このように、御心を互いに慰めなさるうちに……〉

というやさしい情をこめ、翁夫妻との別れを嘆いては、

さきさきも申さむと思ひしかども、かならず心惑はしたまはむものぞと思ひて、今まで過しはべりつるなり。⁽²⁾ さのみやはとて、うちではべりぬるぞ。

〈前から申しあげようと思つていましたが、申しあげたら、必ず心を惑わしなさるだろうと思つて、今までは黙つて過ごしてきたのです。でも、そうはいかないと思つて、打ち明けるのです。〉

と、老父母の心情を汲み、

かの国の父母のこともおぼえず。ここには、かく久しく遊びきこえて、慣らひたてまつれり。いみじからむ心地もせず。悲しくのみある。

〈あの国の父母のこともおぼえていません。ここでは、このように長い間滞在させていただいて、親しみ申しあげました。故郷に帰るといっても、嬉しい

気持ちもありません。悲しい思いでいっぱいです。〉

といつて、「もろともにいみじう泣く」〈共に激しく泣く〉のである。

ここには「地上」の女、人の子としてのかくや姫がいる。地上との別れに際して、せきたてる天人たちを「物知らぬことなたまひそ」〈わからぬことをおっしゃるな〉とたしなめ⁽³⁾ さえしている。非情の世界の人が人間の心情をもつてたしなめる。かくや姫は、ここまで「もののあはれ」を知る人間として描かれているのである。そしてまた、かくや姫に徹する人間の「心」こそ、平安時代の貴族社会の子女の持つ、あるいは持つべき「心」であつたといえるであろう。かくや姫には「現代」の「あるべき」「心」が宿るのである。ここに、説話とはまったく性格を異にする物語の描き方を見ることができ。

『竹取物語』の現実性は、五人の貴公子による求婚譚に、より顕著である。五人の求婚者は皇子であり大臣であり納言^{*なごん}である。当代の上流貴族社会を構成する要員といえるであろう。これを徹底的に戯画化しているのである。

『竹取物語』過半のページ数を割いているこの五人の貴公子の求婚譚に当たる部分を、『今昔物語集』の説話に求めれば、わずか数行の筋書きに尽きてしまうこととなる。説話が伝承「話型」の筋道を忠実にたどろうとしたものとすれば、『竹取物語』の五人の貴公子の話の性格づけは、虚構によつて現実の世態を活写しようとする物語ジャンルの性格を示すものといわなければならないであろう。

物語は、その本質的性格として、相反する二つの性質——古代的な伝承性と、平安時代の「現代」を描く現実性とを合わせ持つのである。『竹取物語』をたんなるお伽噺、あるいは芸術童話とだけみなすこともできないし、すべてを社会風刺小説で割り切るのも無理であろう。古代的な伝承性の地盤の上に、かなり無造作に現実性が重ねられている。し

たがって、『竹取物語』を、現実的題材と伝奇的題材との相反する二つの契機^{*}の統一の世界とまで理解することは、私にはできない。統一ではなくて結合というべきであろう。古伝承の基層を維持しながら、これに現実性を結合させる、——物語文学はこうしたところから出発したとみるのである。

(鈴木一雄「物語文学を歩く」による)

〔注〕世態——世の中の有り様。

伝奇的——怪奇や幻想に富んだ。

「物語の出で来はじめの祖」——『源氏物語』で述べられている『竹

取物語』についての評。

納言^{なごん}——大納言、中納言などの総称。

契機——要因。

〔問1〕同じく竹取翁譚の伝承を採録したと思われる『今昔物語集』と

あるが、この『今昔物語集』の特徴について筆者はどのように述べているか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 不可思議な出来事の原因を解き明かすことよりは、むしろ不可思議さをそのまま受け入れ、出来事の概要を伝えようとする。

イ 現実社会を色濃く反映した貴公子の求婚譚を除き、あくまでも伝承された説話の話を貫いて、事柄を忠実に採録している。

ウ 出来事の本質にかかわらず、人々が関心を寄せると書き手が判断した事柄を収集し、それを脚色せずに詳細に記そうとする。

エ 超現実的な出来事を漢文訓読調の表現を多用し、登場人物に感情を持たせずに描写することで、歴史としての側面を強調している。

〔問2〕⁽²⁾ さのみやはとて、とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 「かくや姫」が天上界に戻るべき者であることを翁夫妻に打ち明けるのは、この上もなくつらいと思って、

イ 「かくや姫」がやがて天上界に戻る身であることを話すべきなのに、翁夫妻を前にすると言い出せないと思って、

ウ 「かくや姫」が天上界に戻るべき日が迫っていることを、翁夫妻に告げなければならぬと思って、

エ 「かくや姫」が間もなく天上界に帰ることを知ったら、翁夫妻は悲しみにくるだろうと思って、

〔問3〕⁽³⁾ さえと同じ意味・用法のものを、次の各文の――を付けた「さえ」のうちから選べ。

ア そのことさえ伝えることができたならもう安心だ。

イ 己を信じてさえいれば必ず道は開ける。

ウ 彼女の発表には余裕さえ感じられる。

エ この山さえ越えてしまえば後は平らな道だ。

〔問4〕⁽⁴⁾ かくや姫には「現代」の「あるべき」「心」が宿るのである。とあるが、筆者は「かくや姫」についてどういうことを述べているか。

次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 相手の気持ちや状況を推し量り、自分の感情を抑えて常に冷静かつ理智的に振る舞うという、現代から見た平安女性の典型的な性格を具現しているということ。

イ 相手をいつくしみ、共に喜び、悲しむという、現代に至るまで時代に左右されることなく人間が普遍的にもっている理想的な性質を有しているということ。

ウ 相手の身分や地位に臆することなく、自分の思いや考えを率直に表明するという、平安時代の人々からすると新しい女性の姿を体現しているということ。

エ 相手の立場や心情を思いやり、それに即した判断や対応をするという、物語が成立した当時の人々にとつての望ましい資質を備えているということ。

〔問5〕 本文を通して、『竹取物語』の新しさはどのような点にあると筆者は述べているか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 古くから継承されてきた話型に社会の諸相を融合させ、事実を記した歴史以上に現実世界の真の姿を表現することに成功した点。

イ 古代の伝統的な話の枠組みを踏襲しつつ、その上に平安貴族社会の様相を重ね合わせ、そこに生きる人々の心情をも写し取った点。

ウ 古伝承には見られない、人間らしい情にあふれる「かくや姫」と感情のない天人との対比によつて、人間の精神世界の豊かさを示した点。

エ 古い伝奇的な語りの枠を排除して現実社会を風刺的、批判的な視点で捉え、人間の心の底に潜む感情までも浮かび上がらせた点。